紹介

R・W・サザーン著（上條敏子訳）

『西欧中世の社会と教会
——教会史から中世を読む——』

本書は、R. W. Southern, *Western Society and the Church in the Middle Ages*, Penguin Books, 1970 の全訳である。著者のサザーン（一九一二～二〇〇一）は、特に、一〇世紀後半から一三世紀初頭にかけての中世社会を生き生きと描いた『中世の形成』（みすず書房、一九七八）で名高く、今回邦訳された本書においても、豊富な史料と具体的な事例を用いた叙述が行われている。ではさっそく、本書の概要を紹介しよう。

まず、最初の二章で本書の基本的な方向性と見通しが提示される。第一章「教会と社会」においては、教会と社会を分離したものとしては理解せず、教会や修道院などの組織的変遷を、社会変容の中に位置づけようとする本書のねらいが明示される。著者は、中世の教会と社会は一つであり、両者は相互に影響を及ぼしあう関係であったと主張するのである。次に、第二章「時代区分」では、本書に議論の枠組みを与えるため、七〇〇～一〇五〇年：初期の時代、一〇五〇～一三〇〇年：成長の時代、一三〇〇～一五五〇年：不穏な時代といった時代区分が提起される。この区分に沿って、世俗権力が宗教的権威に支えられていた時代から、教会改革後の聖俗分離と教会ヒエラルキーの強化を経た後、政治的・社会的変動を受けて教会勢力が動揺を始める時代までの歴史的展開が示されていく。

続く三つの章では、ローマ教会あるいは教皇庁の形成と教皇政治の展開に焦点が当てられる。第三章「キリスト教世界の分裂」においては、七世紀から一五世紀に渡る西欧世界についての歴史が、ローマ教会とギリシア教会の関係性から読み解かれる。一〇五四年の教会大分裂に至る両者の関係、そして、分裂以後に再統一の道が模索されつつも、最終的にローマ教会の勝利に終わるまでの過程が綴られることになる。ついで、第四章「教皇権」に議論は移る。この章で著者は、前述した時代区分に沿い、教皇権力とそれを裏付けた権威を問う。初期・成長の時代に「聖ペテロの代理人」「キリストの代理人」としての権威を背景に強大な権力を引き出していた教皇が、後にその権威を失墜させ、行政活動に忙殺されていく姿がここで描かれる。第五章「司教と大司教」内では、前章で検討された教皇と教皇庁を支えていたスタッフ——司教団——についての考察が行われる。国王の片腕として俗人教化に努めていたカロリング期の司教が、カロリング朝の崩壊以後一三世紀にかけて、教皇支配への従属を強めていく様を、著者は示す。

最後の第六・七章では、主に修道会中心の議論がなされる。第六章「修道会」には、本書で最も多くのページが割かれている。この章では、ベネディクト修道院から新修道会——アウグスティノ修道参事会とシトー会——、そして托鉢修道会へと続く、一連の修道会（院）についての概観が試みられる。ここでは、俗人による寄進やこれに対する修道院の祈祷、托鉢修道会による説教活動といった具体的な実践が取り上げられつつ、各修道会（院）と都市および農村社会の関係についての描写が進められる。特に著者は、修道会の歴史こそが、社会

的・宗教的変化の相互関係を他のどこよりも明確に表現していると力説する。本章でとりわけ具体的な叙述が見られるのも、こうした見方が一因であるといえよう。第七章「周縁の修道会と、修道会に対するアンチ・テーゼとしての宗教運動」では、前章で検討された修道会と関連して、その周縁を取り巻く集団についての言及がなされる。ここでその対象となるのは、民衆宗教を体現する鞭打苦行団や、女性を中心とするケルンのベギン会、そして、デーフェンテル（オランダ）の共同生活信心会などである。著者は、具体的な人物を取り上げつつ、正統教会組織とは一線を画す、ベギン会の忘我・幻視的な神秘主義的霊性や、形式的な拘束的誓願に捉われることなく内面的な魂への隠遁を求める共同生活信心会の霊性などを、これら周縁集団から読み取ろうとする。最後に結論部で、これまでたどってきた議論が簡潔に総括され、本書は締めくくられる。

本書で展開される流麗かつ、時には大胆な比喩を用いた歴史叙述は印象的である。また、著者が多種多様な史料から引用する数多くの証言や記録に、読み手は同時代人の生きた世界を感じ取ることができる。ややもすると無味乾燥な事実の羅列に終始してしまいがちな概説書とは異なり、本書を無理なく通読することができる一因は、これらの点にもあるのではないだろうか。たしかに、本書はその原著の古さ故か、近年における宗教史研究の成果と照らし合わせると、問題とされる部分も多い。しかし、中世ヨーロッパを理解するにあたって不可欠な教会組織と社会の関係を、該博な史料知識と華麗な筆致により丹念に跡づけた本書は、依然として良質な入門書としての価値を失ってはいないだろう。また、巻末には索引や六～一六世紀にかけての教皇一覧に加え、著者の業績一覧もまとめられており、有益である。

（A5判　四七二頁　二〇〇七年四月　八坂書房　四八〇〇円）

（森本亮介　京都大学大学院文学研究科修士課程）

受贈誌

（二〇〇七年二月二八日～二〇〇七年一〇月二二日）

ANNALI DI CA'FOSCARII（ヴェネチア大学外国言語・文学部東アジア研究科）四五―三（三七）

ANTHROPOLOGICAL SCIENCE（The Official Journal of THE ANTHROPOLOGICAL SOCIETY OF NIPPON）一一五―一

EAST ASIAN REVIEW(The Asian Research Insitute)一一

Historia Mexicana（El Colegio De Mexico）一二五～一二六

merc（一橋大学）創刊号

RITSUMEIKAN LAW REVIEW（The Ritsumeikan University Law Association）二四

アーカイブズ・ニューズレター（人間文化研究機構国文学研究資料館）六

アジア・アフリカ文化研究所研究年報（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所）四一